

13 世紀初めに書かれた霊的生活の手引書 *Ancrene Wisse* (以後 *AW*) は、Wada (2003, p. 3) の指摘の通り、直喩や隠喩、身近な例えが多用されている。この書の最初の対象読者であったとされる 3 人の若い姉妹のように、人生経験が少ない読者を教え導く際には、日常的な例えを用いてわかりやすく説明することが効果的だからである。本発表では、比較的初期の写本 Cambridge, Corpus Christi College, MS402 に基づく Bella Millett (2005-06) の校訂版を対象とし、五感を扱う Part 2 に見られるメタファーや比喩表現を中心に、主として Lakoff and Johnson ([1980] 2003; 以後 L&J) の「概念メタファー」の考え方を参照して分析した。

L&J (ch. 12) は概念同士が互いに関係し合って 1 つの全体的な概念体系を構成する場合、その多くが空間の方向性に関係していることを示し、我々の空間概念は UP-DOWN, FRONT-BACK, IN-OUT, NEAR-FAR など経験的に知覚される概念から成り立っており、これらの方向性は他の空間概念よりも重要であると述べている。このように空間の方向性を他の概念に付与するメタファーは、L&J によって「方向づけのメタファー (orientational metaphors)」と呼ばれているものだが、*AW* にはその例が豊富に見られる。なかでも *AW* のテキストで特に重要なものが IN-OUT の方向性である。このテキストで明確に区別されている Inner Rules と Outer Rules は、まさにこの IN-OUT の方向に対応している。先行研究 (Sauer and Bledsoe 2021) で指摘されているように、本書の構成自体が Outer Rules を扱う Part 1 と Part 8 の間に Inner Rules を扱う 7 つのパートが置かれるという容器のような構成になっている。この 2 種類の Rules の区別の重要性は、このテキストの Preface の冒頭において、2 つの Rules の区別がまずラテン語で、続いて英語で説明されるという構成にも反映されている。また、Part 2 の冒頭では、五感の魂が入っている心という空間を守っている守衛 (wardens) であるという比喩的な説明がなされ、人間の身体が心を入れる部屋、すなわち容器に例えられている。この比喩的説明にも見られるように、IN-OUT の対応は *AW* の Part 2 においても一貫して保たれている。

本研究発表においては、*AW* のテキストで危険性が説かれる感覚の順に、各説明に用いられている多様な「概念メタファー」の例を概観した。近接性、NEAR-FAR の重要性を示すために、まず次の例を詳しく考察した。

Non solum appetere sed et appeti uelle crimosum [est]: ‘3imi mon oðer habbe wil [for] to beon i3imed of mon ba is haued sunne.’ *Oculi prima tela sunt adultere:* ‘Þe echnen beoð þe [arewen ant te forme arnes] of Lecheries prickes.’ Alswa ase men worreð mid þreo cunes wepnas, wið scheotung ant wið speres ord ant wið sweordes [egge], al richt wið þilke wepnen—þet is, wið schute of eche, wið spere [of] wund[un]de word, wið sweord of deadlich hond[lunge]—werreð Lecherie, þe stinkinde hore, vpon þe lauedi Chastete, þet is Godes spuse. Eareast scheot þe arewen of þe licht echnen, þe fleoð lichtliche forð ase flaa þet is iuiðered ant stikeð i ðere heorte. Þer-efter schakeð hire spere ant neolachet vpon hire, and mid schakinde word 3eueð speres wunde. Sweordes dunt dunricht, þet is þe hondlunge; for sweord smit of nech ant 3eueð deaðes dunt, ant [hit] is [soðes]—weilawei!—nech ido wið ham þe cumeð swa nech togederes þet ouðer hondli o[þ]er oðer ifele [oþer]. (*AW*, Part 2, ll. 157-72)

彼女達の目、ことば、手で触ることが、それぞれ矢・槍・剣の 3 種類の武器に例えられている。宗教的な文脈では、口に関するものとして味覚だけでなく、ことばも同時に扱う。ここでは、彼女達がその 3 つの武器を用いて男性を攻撃すると述べている。このメタファーでは、近接性、すなわち NEAR-FAR が、罪の大きさを表す重要な役割を果たしている。接触は、接近戦で用いられる剣に相当し、相手に致命傷を与える一方で、そのためには相手のすぐそばまで近づかなくてはならず、自分も同様に致命傷を負う危険を伴うという。視覚、口に関わる行為であることば（話すこと）、接触の順に相手との距離が近づくため、罪もより重くなると説く。発表では続いて、近接性の重要性が、七大罪について説く Part 4 の *Ira* (wrath; 憤怒) を一角獣に例えた部分にも反映されていることに触れた。上記引用に続く誘惑についての部分でも戦争のメタファーが同様に用いられているが、戦いにおける女性の立場が上記の箇所とは異なっており、続けて理解するには負担の大きい構造になっている。それにもかかわらず、読者が無理なく理解できる理由として、*AW* の例え話を用いた説明のテキスト構造が関連性理論 (Sperber and Wilson [1986] 1995) のいう「意図明示的刺激」として機能していることを論じた。

UP-DOWN という方向性に関しては、L&J が第 8 章で DOVE FOR HOLY SPIRIT という象徴表現に言及していることをまず紹介し、*AW* にも GOOD IS UP, BAD IS DOWN という経験的知覚に基づくメタファーを用いて anchoress を鳥に例える表現が散見されることを指摘した。以下においても、上方向にある神のいる場所「天」と、下方向にある「この世」が対比されている。

On oðer haf, as he seið, *luge silentium cogit celestia meditari*, ‘Long silence ant wel iwist nedeð þe þohtes up towart heouene’. Alswa as 3e mahe seon weater, hewn me punt hit ant stoppeð hit biuore wel, þet hit ne mahe duneward, þenne is hit inedd a3ein

forte climben uppart, ant 3e al þisses weis pundeð ower words, forstoppið ower þohte, as 3e wulleð þet ha climben ant hehin toward heouene, ant nawt ne fallen duneward ant tofleoten zont te worlt, as deð muchel chaffe. (*AW*, Part 2, ll. 388-95)

「ダムの水を堰き止めて下に流れないようにすると、水が上に昇ることしかできないように、長く沈黙を守ると思考が天に向かう」と、人間が物理的に経験する現象を思考の比喩として用いている。

本研究発表では、共感覚の観点から見て興味深い比喩表現にも着目した。次の例においても、NEAR-FAR の知覚が、神に近づく霊的な思考か、逆に神から遠ざかる現世的な思考かという対比の基盤になっている。

Bis beoð Seint Gregoires word in his *Dyaloge*: ‘Ase neh as ure muð is to worldlich speche, ase feor he is Godd hwen he spekeð toward him ant bit him cani bone.’ For-þi is þet we 3ei3eð upon him ofte, ant he firseð him awei frommard ure steuene, ne nule nawt iheren hire, for ha stinkeð to him al of þe worldes meaðelunge ant of hire chafle. (*AW*, Part 2, ll. 430-34)

世俗的なおしゃべりは本来、聴覚を煩わせるはずだが、神の嗅覚を煩わせるものとして、異なる感覚の表現を転用する共感覚的比喩 (synesthetic metaphor) を用いて説明している。共感覚的比喩の転用には方向性があることがわかっており、聴覚が嗅覚に転用されることも、嗅覚が聴覚に転用されることも稀であるとされるが (池上 1996, p. 130)、これはその稀な方向への転用例である。宗教的なテキストでは、神が罪を嫌うことを表す際には、罪が神に臭うという表現が多く用いられ、ここで用いられている動詞 *stinken* もその1例である。また、別の箇所でも、「神の愛のために、世俗的なことを聞いたり、世俗的なことばを話したり、肉体的な視覚でものを見たりするのを控えた人は、霊的な視覚、霊的な聴覚、霊的な発話から生じる味わいと知識を得る (þis smeche ant tis cnawunge kimeð of gastelich sihðe, of gastelich herunge, of gastelich speche, þet ha schulen hebben þe forgað for Godes luue worldliche herunges, eorðliche spechen, fleschliche sihðen.)」(*AW*, Part 2, § 33, ll. 679-82) と複数の知覚を味覚に転用している。Newhauser ([2014] 2019, p. 22) は、中世の味覚の理解の参照範囲は今日より広がったと述べているが、ここで味覚が知識と並記されていることにも、その参照範囲の広さが反映されていると見ることができる。Newhauser ([2014] 2019, p. 10) は、中世では対象に近づかなくてはならない味覚と触覚が、残りの3つの感覚より重要であったとも述べている。

AW Part 2 の聴覚に関する部分でも話してはならないことが論じられ、罪が臭うことを示す表現がしばしば用いられる。興味深いことに、お世辞は罪の臭いがしないという。また、嗅覚について述べた Section 37 以降においても、悪魔は悪臭がするが、時々甘い匂いで我々を騙そうとすると注意を喚起し、この世で匂いに恵まれなかった人は天国で素晴らしい香りに恵まれることがあると、この世とあの世で鏡のように嗅覚に関する経験が逆転するという。この現世的なものとの霊的なものの対比に関連して、本発表では、L&J ([1980] 2003, p. 24) が挙げたトラピスト修道会の価値観に関する例には、別の説明が可能であると主張した。L&J は、トラピスト修道会の LESS IS BETTER<より少ないことは、よりよいことである>、また、SMALLER IS BETTER<より小さいことは、よりよいことである>という「方向づけのメタファー」が、その社会文化全体で主流となっている価値観と矛盾することを指摘し、その理由は、トラピスト修道会が VIRTUE IS UP<徳行は上> という価値観を何よりも大切にしているためであると説明している。しかし、同様の価値観を説く *AW* の著者が、現世的な感覚を控えた人は、霊的により多くのすばらしい感覚を得られると繰り返し述べることから、本発表では、社会文化全体で主流となっている MORE IS BETTER は、この宗教的な文脈においても実は保たれており、最終的により多くのものを得ようとする、現世的なものに関してのみ LESS IS BETTER が成り立つという説明が可能であると指摘した。

Part 2 で最後に説明されるのは5つ目の感覚である触覚である。*AW* の著者は他の感覚よりも触覚を守るよう述べている。Newhauser ([2014] 2019, p. 10) が指摘するように、近くにあるものしか知覚できない近接性を伴う感覚であることが、触覚と味覚が重要視される理由となっていることを指摘し、発表を終えた。

参考文献

- 池上嘉彦 (編), 1996, 『英語の意味』 テイクオフ英語学シリーズ 3, 東京: 大修館書店。/ Lakoff, G. and Johnson, M., [1980] 2003, *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一、楠瀬淳三、下谷和幸 (訳), 1996, 『レトリックと人生』 東京: 大修館書店。) / Millett, B., (ed.), 2005-06, *Ancrene Wisse: A Corrected Edition of the Text in Cambridge, Corpus Christi College, MS 402, with Variants from Other Manuscripts*, 2 vols, EETS, o.s. 325-26, Drawing on the Uncompleted Edition by E. J. Dobson with a Glossary and Additional Notes by Richard Dance, Oxford: Oxford University Press. / Newhauser, R. G. (ed.), [2014] 2019, *A Cultural History of the senses in the Middle Ages*. London: Bloomsbury Academic. / Sauer, M. M. and Bledsoe, J. C., 2021, ‘Bodies, Objects, and the Significance of Things in Early Middle English Reclusion: An Introduction,’ in Sauer and Bledsoe (eds), *The Materiality of Middle English Anchoritic Devotion*, Leeds: ARC Humanities, pp. 1-15. / Sperber, D. and Wilson, D., [1986] 1995, *Relevance: Communication and Cognition*, 2nd edition, Oxford: Blackwell Publishing. (内田聖二、中達俊明、宋南先、田中圭子 (訳), 1999, 『関連性理論—伝達と認知—』 東京: 研究社。) / Wada, Y., 2003, *A Companion to Ancrene Wisse*. Cambridge: D. S. Brewer.